

大輔成能ガ子息傳内左衛門尉成直三千餘騎ニテ陣取タリツルガ、此間河野四郎通信ヲ攻ント  
テ伊豫國ヘ越タリト聞ユ、餘勢ナドハ、少々モ候ラント云ケレバ、○中打ヤノトテ、勝宮ニ押寄  
セテ見レバ、傳内左衛門尉ガ兵士ニ置タリケル歩兵等少々在ケレ共散々一蹴散シテ逃ルハタ  
マタマ遁ケリ、○中新八幡ノ寶前ヲバ判官下馬シテ再拜スレバ、郎等モ又如此、判官ハ勝浦ノ勝  
モカツト讀勝宮ノ勝モカツトヨム、旁ノ軍ニ打勝テ、今大菩薩ノ御前ニ參源氏ノ吉瑞顯然也、○  
略

〔日本書紀九神功〕九年○仲四月、皇后功還詣檣日浦、解髮臨海曰、吾被神祇之敷賴皇祖之靈浮涉滄  
海、躬欲西征、是以今頭濮海水、若有驗者髮自分爲兩、卽入海洗之、髮自分也、皇后便結分髮而爲髻○  
略

〔筑前國續風土記十遠賀郡〕若松

町あり、武家多し、是當國東の端にありて、豊前長門凡上方よりの渡りなり、むかしは修羅多村の  
枝村なりしが、長政卿入國の後、則村となる、○中長政公入國の後、山の所に夜船數十艘をつなぎ、  
船司舟人等多く置て、急用に備らる、是は蘆屋洋は風あらき時は、船の往来なりがたき故此所よ  
り便の人を舟に乗せて、大坂につかはすべきため也。

〔筑紫道記〕移り行て、筑前國若松の浦といふに著ぬ、○中かた山かけて、植木高き陰よりうちとの  
海をみるに、鹽屋の煙暮わたり、入日影に移ふほど、又いふかたなし。

〔平家物語八〕太ざいふおちの事

山がへも又かたきよすと聞えしかば、取ものも取あへず、平家は小舟共に取乗て、終夜ぶせんの  
國柳が浦へぞわたられける、爰に都をさだめて、内裏つくらるべしと、公卿せんぎ有しか共、ぶん  
げんなければ、それもかなはず、